

## A-X-1

### 脳幹電位は消失しながら皮質磁界で聴覚機能を確認した意識障害例

<sup>1</sup> 広南病院 東北療護センター, <sup>2</sup> 同 脳神経外科 <sup>3</sup> 東北大学病院耳鼻咽喉・頭頸部外科

○菅野彰剛<sup>1</sup>, 中里信和<sup>1</sup>, 長嶺義秀<sup>1</sup>, 藤原 悟<sup>2</sup>, 川瀬哲明<sup>3</sup>

【目的】聴性脳幹反応(ABR)は他覚的な聴力検査として確立されているが, ABR が消失しながら会話が可能な症例も報告されている. 今回, ABR が無反応ながら, 聴覚誘発脳磁界反応(AEF)がほぼ正常だった例を経験したので報告する. 【症例】69 歳男性. 歩行中に乗用車にはねられ受傷. 前医に搬送時, 深昏睡. びまん性軸索損傷, 両側前頭葉・側頭葉脳挫傷, 外傷性くも膜下出血にて保存的治療を受けるも, 意識障害が遷延し, 事故後 7 ヶ月で当院へ転院. 【方法】ABR および AEF は日本臨床神経生理学会指針に基づいて施行した. 【結果】ABR は, 単耳・両耳刺激のいずれにおいても無反応. AEF は, 左耳刺激では無反応ながら, 右耳刺激では両側性の反応を確認した. 主反応 N100m の潜時は, 左半球で 90.8 ms と正常で, 右半球では 128.5 ms と軽度の延長を認めるのみであった. 双極子モデルにより N100m の起源は, 左右の側頭葉上面に推定された. 【考察】ABR が消失しながら, 聴覚機能の残存が確認された過去の症例では, その機序は充分には説明されていない. AEF における N100m 反応は, 心理学的聴覚残存機能をよく反映しており, 本症例のように意識障害が高度な例では, 併用する意義が高い.